未知を歩こう。
信州
長野県PRキャラクター
「アルクマ」
洗馬城跡
③実相院宝篋印塔
実相院
傍陽小
158
35
至長野市松代
曲尾
誉田足玉神社
尾引城跡・打越城跡
（横尾城跡・内小屋城跡）
信綱寺
古城緑地公園
神川
山家神社
長小
至上田市菅平
横沢
駐車場有
松尾古城跡
（松尾城跡）
真田山城跡
（真田氏本城跡）
駐車場有
信綱寺周辺拡大図
山
尾引城（横尾城）
信綱寺
歩道
駐車場
黒門
神川
真田中央公民館
砂利道
根小屋城跡
真田中
真田中央公民館
荒井
175
至須坂市
菅平小中
菅平
35
144
4
②菅平唐沢岩陰遺跡
唐沢の滝
菅平ダム
①四阿山の的岩
砥石城跡（戸石城跡）
駐車場有
④真田氏館跡
本原小
天白城跡
406
登山口
144
菅平口
至群馬県
瀧水寺
175
上田市菅平
上田市
真田町
伊勢山
至上田市街
至東御市
至上田市真田町
文化財めぐりマップ
マップ作成　長野県教育委員会事務局
東信教育事務所総務課
お問い合わせ　電話：0267－31－0250
平成28年10月作成

①四阿山の的岩（国天然記念物）

四阿山の南山腹、群馬県境の尾根に突起する安山岩の大岩脈で、鳥居峠からの登山道中途にある。地下からのマグマが、その上にあった岩の割れ目に板状に貫入し、その後周囲の岩が侵食により崩壊したため、岩脈が尾根上に屏風のように露出した。別名屏風岩とも呼ばれている。規模は、幅2～3メートル、全長約200メートル、高さは最高15メートルである。柱状節理が発達し、六角柱状の俵を積み重ねたような眺めは壮観である。

的岩の名の由来は、岩壁の一部に開いた大穴が、その昔弓の名手源為朝が矢を放って開けたあけた穴であるとか、巻き狩りに来た源頼朝がこの岩を的にして弓を射たとの伝説による。

（所在：上田市菅平）

②菅平唐沢岩陰遺跡（県史跡）

唐沢の滝の左岸に、岩塊が廂のように山肌に張り出した岩陰がある。間口15メートル、奥行き2メートル、高さは約3メートルほどである。土器や石器が採集されることから、昭和38年（1963）に発掘調査が行われ、縄文時代～弥生時代の遺跡であることが分った。

縄文時代は、中期（約4500～4000年前）を除く早期（約9000年前～）から晩期（～約2000年前）、弥生時代は中期から後期（約2000前～1700年前）の土器や石器が発見されたが、当遺跡を最も特徴づけるものは、縄文晩期から弥生時代にかけてと推定される、装飾付鹿角・垂飾・牙鏃・角鏃などの骨角器、シカ・イノシシ・クマ獣骨の出土である。

まとまったクマの出土は稀で、集団的な狩猟法の発達とともに狩猟専業の山の民の存在が推定されている。

（所在：上田市菅平）

③実相院宝篋印塔（県宝）

寺伝によれば、天台宗の実相院は神亀2年（725）行基により、峰山の堂平に開創され、何時のころか現在地に移されたとされる。宝篋印塔も堂平の高寺にあったが、明治初年に参道の入口付近に移され、昭和初期に本堂前の現在位置に安置された。総高213.5センチメートル。

塔身の東面に「貞治六年三月」（1367）の刻銘があり、欠損箇所もなく南北朝時代の典型的な関東様式の宝篋印塔である。寺伝によれば、観音堂を再建しその鎮護のために造塔したと伝えられる。

（所在：上田市真田町）

④真田氏館跡（県史跡）

地元でお屋敷と呼ばれるこの遺構は、砥石城及び上田城へ移る以前の真田氏の館跡で、永禄年間（1558～70）に幸隆及び長男信綱により築かれ、信綱が長篠の戦いで討死の後は信綱夫人が居住したものと推定されている。

大沢川の扇状地に、大沢川が刻む谷を背面（北面）の堀として四周に土塁を廻らし、その規模は、北辺150メートル、南辺160メートル、西辺130メートル、東辺80メートルの東南に隅欠（すみおとし）を持つ台形を呈する。北面以外の土塁外には浅い溝があったようであるが明確ではない。大手は南面に構えて内側に入った両袖の虎口としている。

内部は東南から西北に比高約10メートルで傾斜し、大まかには上下二段に整地されており、最も低い西北隅には土塁で仕切られた厩屋跡と伝承される一画がある。上段に祀られている皇大神宮は、真田昌幸が上田城へ移るにあたり、居館の荒廃するのを憂えて勧請し、神聖の地として保存するよう図ったと伝えられる。

（所在：上田市真田町）

⑤戸石城（県史跡）と真田氏城跡群（市指定史跡）

砥石城（戸石城）は、上田盆地の北側を画する太郎山系の東端の尾根上に築かれた、北から枡形城・本城・砥石城と連結する山城を総称する。南西には細尾根で連なる独立状の峰に築かれた米山城があり、さらに周辺の尾根筋にも飯縄城・花見城・柏木城などの小山城があり、築城時を異にするも一体として大城砦群を構成している。砥石城の中でも広い曲輪を幾つも重ねているのは本城で、南斜面には帯曲輪が何段も配され、直下の狭長は谷間には居館跡と目される内小屋を頂点に城下集落が形成されている。

真田氏がその祖と称する小県地域に勢力を張った海野氏は、天文10年（1541）武田信虎・諏訪頼重・村上義清連合軍に敗れて、真田氏ともども本領地を追われた。小県地域への勢力拡大を図る埴科郡の村上氏が、坂木から峠を越えて傍陽の谷に入り、その出口に築いたのが砥石城で、上田盆地はもちろん真田の郷もすっぽり睥睨する。

天文19年（1550）、武田信玄は村上義清攻略のためこの砥石城を攻めたが敗れた。世に言う「砥石崩れ」である。しかし半年後、信玄の配下となっていた真田幸隆は、調略をもってこの城を乗っ取り、以後義清は凋落して行くが、幸隆は本領復帰を果たすと同時に上田方面に進出する足がかりとなる新領地を与えられた。

真田昌幸は、上田城を築く以前の天正10年（1582）前後に、この砥石城を拠点としていたことが推定される文書が残されている。

上田市真田町には、集落背後の里山のような位置に、真田山城（松尾城・十林寺城・真田本城）、天白城、根古屋城、洗馬城、尾引城（横尾城）、打越城、松尾古城など、その地の土豪によって築かれたと考えられる多くの山城がある。

真田山城（真田氏本城）は、真田地域のほぼ全域から砥石城を経て上田方面まで臨むことのできる山頂にあり、眼下に上州へ抜ける道と松代へ通ずる道を押さえており、真田氏館跡の背後にあることなどから、真田地域全域を支配した時点での真田氏の本拠であると考えられ、新たに真田本城との名称も付けられた。天白城は真田氏館跡に最も近い山頂に築かれた山城である。

尾引城（横尾城）は、傍陽川と神川に挟まれた谷底平地にむけて尾を引くように突き出した尾根にある。応永10年（1400）の信濃守護小笠原長秀と「国一揆」の人々との大塔合戦を記した『大塔物語』に、真田氏とともに名がのる横尾氏により築かれた。横尾の集落はその城下集落で、内小屋は館の跡と思われ、背後に衝立のようにうずくまる狭長な尾根には、居館を守るように**打越城（内小屋城）**と呼ばれる砦が築かれている。また、尾引城から北に連なる山塊の奥には、横尾氏の詰城と思われる長尾城が築かれている。この地は横尾氏が武田氏により上州に追われた後に真田氏の支配地となり、真田昌幸は元来横尾氏の菩提寺であった大柏山山麓の寺を、長篠の戦いで戦死した長兄信綱を弔う信綱寺とした。

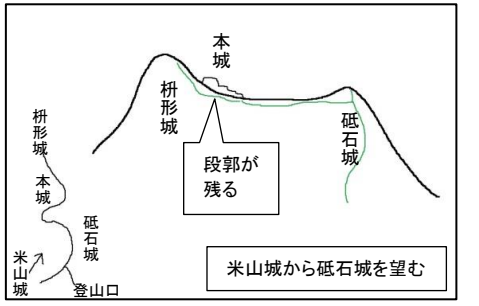
根小屋城は曲尾集落の川を挟んだ対岸の山にあり、急峻な岩壁を巧みに利用して築かれたこの山城は、『大塔物語』に真田氏とともに名が記された曲尾氏の城と考えられる。

洗馬城は、傍陽川と洗馬川が合流する平地の付け根の山頂にあり、山麓の傍陽小学校敷地は城主の居館跡と推定されている。築城者は不明だが、応仁（1467）から2年にかけて、この城で海野氏が村上氏の攻勢を防いでいることが古文書に記されている。

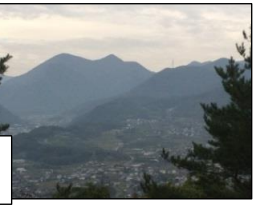
松尾古城（松尾城）は、角間渓谷と鳥居峠向かう谷間の分岐点に屹立する山塊の尾根の中途に築かれている。さらに尾根を上り詰めた地点には遠見番所と呼ばれる施設がある。山が岩質のため石積みの防禦施設が多用される特異な山城である。山塊先端の角間側の山麓は真田氏の古い居館跡と伝えられ、その一角に安智羅明神があり、真田幸隆または幸村の少年時の姿と伝承される神像が祀られている。また、異なる一角では五輪塔や宝篋印塔を墓標とし、火葬骨を納めた墳墓群が発掘され、幸隆以前の真田一族の墓地ではないかと考えられている。

なお、砥石城跡は戸石城跡の字で県史跡に登録されている。また、真田山城跡は真田氏本城跡、尾引城跡と打越城跡は横尾城跡・内小屋城跡、松尾古城跡は松尾城跡の名で上田市の文化財に指定されている。

（所在：上田市）



砥石城から
上田城方面を望む



枡形城から
真田山城方面を望む